看取るという選択肢

～看取りケア事例発表～

まずは・・・

グループホーム長者の森で
施設として看取りケアを始めようと思った動機

ご家族からの要望

社会の動向

グループホームが住まいであるならば・・・

終の棲家にしたいという思い

平成24年10月1日より

『施設で亡くなりたい』という入居者や家族の希望を原則的に受け入れます。

高齢者介護で求められる『看取り』の支援とは？

ご本人、ご家族、スタッフの「不安」についての整理

↓

「不安」や「希望」を出来る限り具体化すること

不安 ： 怖い、不安、なるべくなら避けたいなぁ
一人夜勤の時、どうしよう・・・(スタッフ)
希望 ： 最期にこれを食べさせたい、思い出の場所にもう一度連れて行きたい・・・(家族)

事例紹介

Tさんの事例

【年齢】　91歳
【要介護状態区分】　要介護度３

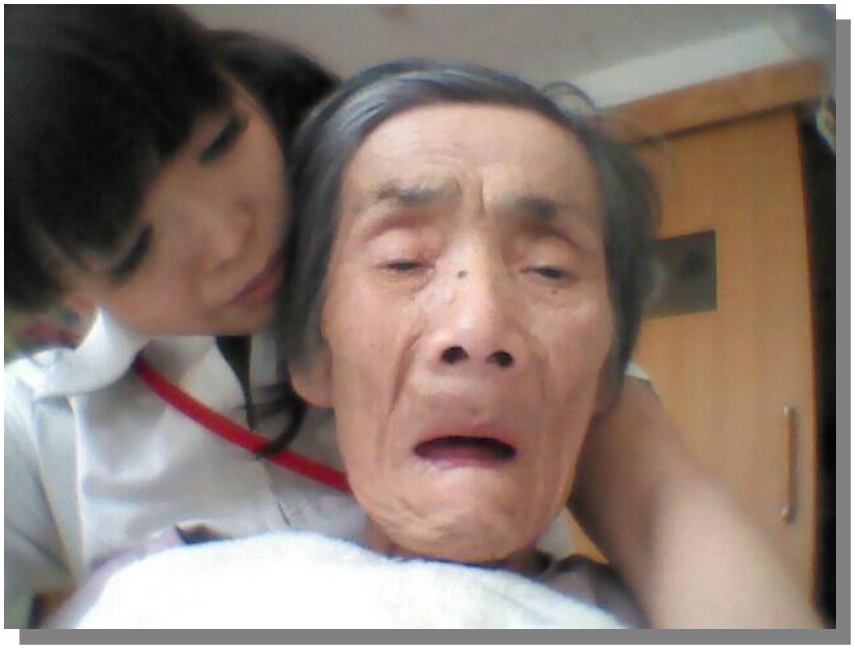
【援助方針】
今年に入り食事量・水分量が減り、水分・食事の飲み込みが大変になってきている。長男様との話し合いにより看取りケアが開始となる。ベットからの転倒防止として畳対応となる。両膝痛や筋力の衰えにより歩行も大変になった為、移動は車椅子となる。家族の意向により病院を受診することなく施設にて経過を見ていく。本人の気持ちが安定し苦痛を感じることがなく、日々穏やかに過ごせるように主治医とスタッフが連携して支援していきます。

想いに寄り添い、やりたいことを

- みんなと一緒にお寿司を食べに・・・。

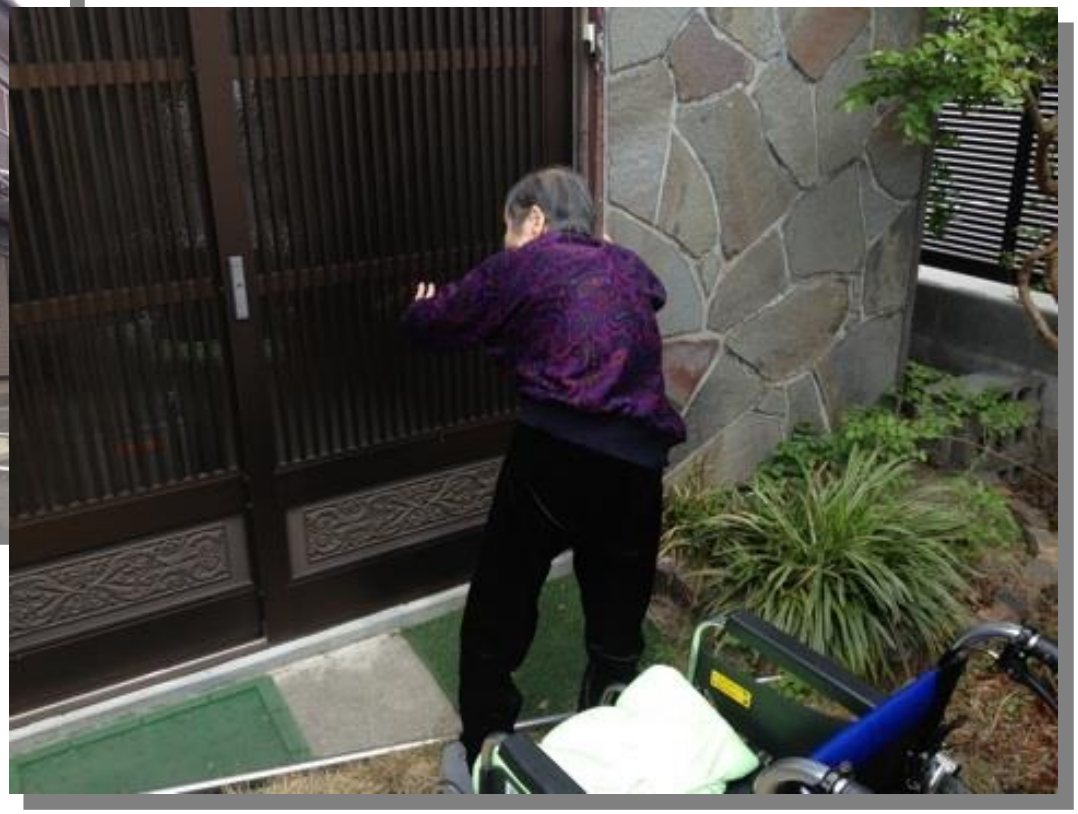
- お買い物でお花を見に・・・。

それぞれの関わり方・・・



- 『お風呂に入りたい』という本人の希望があり、主治医の許可の元、ナースが入浴を行った。
- 可能な限り、皆のいるフロアでの時間を作ったり、慰問への参加も行った。

本人の気持ちが少しでも上がるように・・・



- 久々の実家へ・・・。
- 立ち上がる気力すら無かったのに・・・

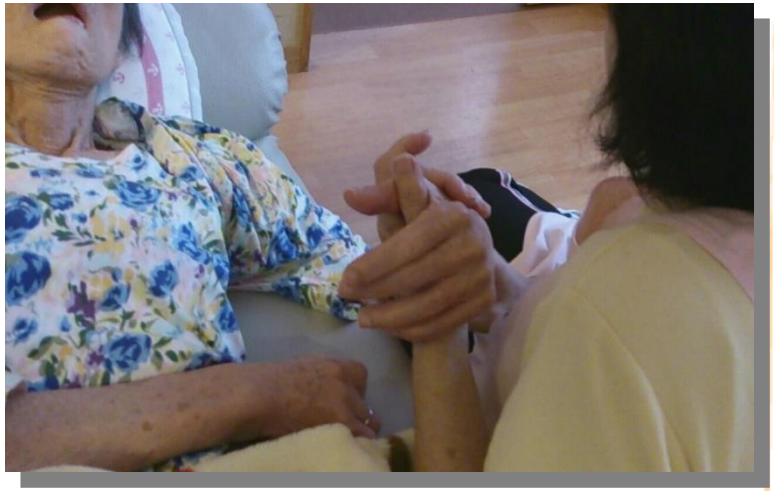
偶然にも・・・

- 入居者さんを古くから知る同じ組の近所の方とバッタリ。

- 思わず嬉し涙が・・・昔話に華が咲きました。

そして・・・・

- 平成26年7月4日（金）に余命1週間と診断。
- 7月5日（土）の夜8時頃に状態が悪化するも、その後一度盛り返す。
- 7月6日（日）　5：15に状態が悪化したため、その後夜勤者より管理者へ連絡。
- 7月6日（日）　6：10にドクターによる死亡確認。
- 7月5日（土）には息子様に来ていただいたが、残念ながら亡くなる時には来れなかった。
- T様は約二ヶ月食事を摂らず、ほぼ水分だけで生活しており、身体の全てを使い切って最期を迎えた。



Tさん。
こもれび一丁目
長者の森
ありがとう。

M様のデスカンファレンスでのコメント　（偲びの会）

- デスカンファレンスでのスタッフコメント

  - 看取りとはいえ全対応ができなかった。こうすれば良かったと後悔が多い。一人ずつのスキルを上げる必要があると感じた。ちょっとした変化でも相談してほしい。
  - 寄り添う時間がもっと欲しかった。
  - 無知、無力を感じた。終の棲家にしたいという強い想いがあるため、実体験をもっとしたい。終わってみてどれが正しかったのか？　とにかく家族を不安にさせるわけにはいかなかった。
  - 人手不足を感じた。そのため家族にももっと一緒にいてもらい、サポートなどをしてもらうべきでは？
    その他、多数

T様のデスカンファレンスでのコメント　（偲びの会）

- 本当にいろいろな事を学ばせてもらった。
- 介護面では様々な支援をすることができた。
- 悔いがあるとすれば、身内へのアプローチがあまりできなかったこと。
- 自己満足かもしれないが、その日その日が最期のつもりで手を尽くした。
- 褥瘡 を作らず、綺麗なご遺体で良かった。
- 寄り添う時間があって良かった
- 皆が優しくしてくれて本当に有難かった。

まとめ

『死』を考えるとき
『生きること』を切り離せない

なぜなら

『死』は『生きること』の
延長線上にあるからである

だからこそ

『今』を『その人らしく』
生きることに繋がる

つまり

『死』だけを考えるケアは
看取りケアではない！

迷ったり、悩んだり、振り返ったり、悔んだり、のプロセスこそが看取りケアである

完璧な答えなんてない、死に様も十人十色

どんな看取りケアでも1つや2つ悔いが残るもの

家族の揺れる心に寄り添う、付き合う

施設側の自己満足、価値観の押しつけであってはならない

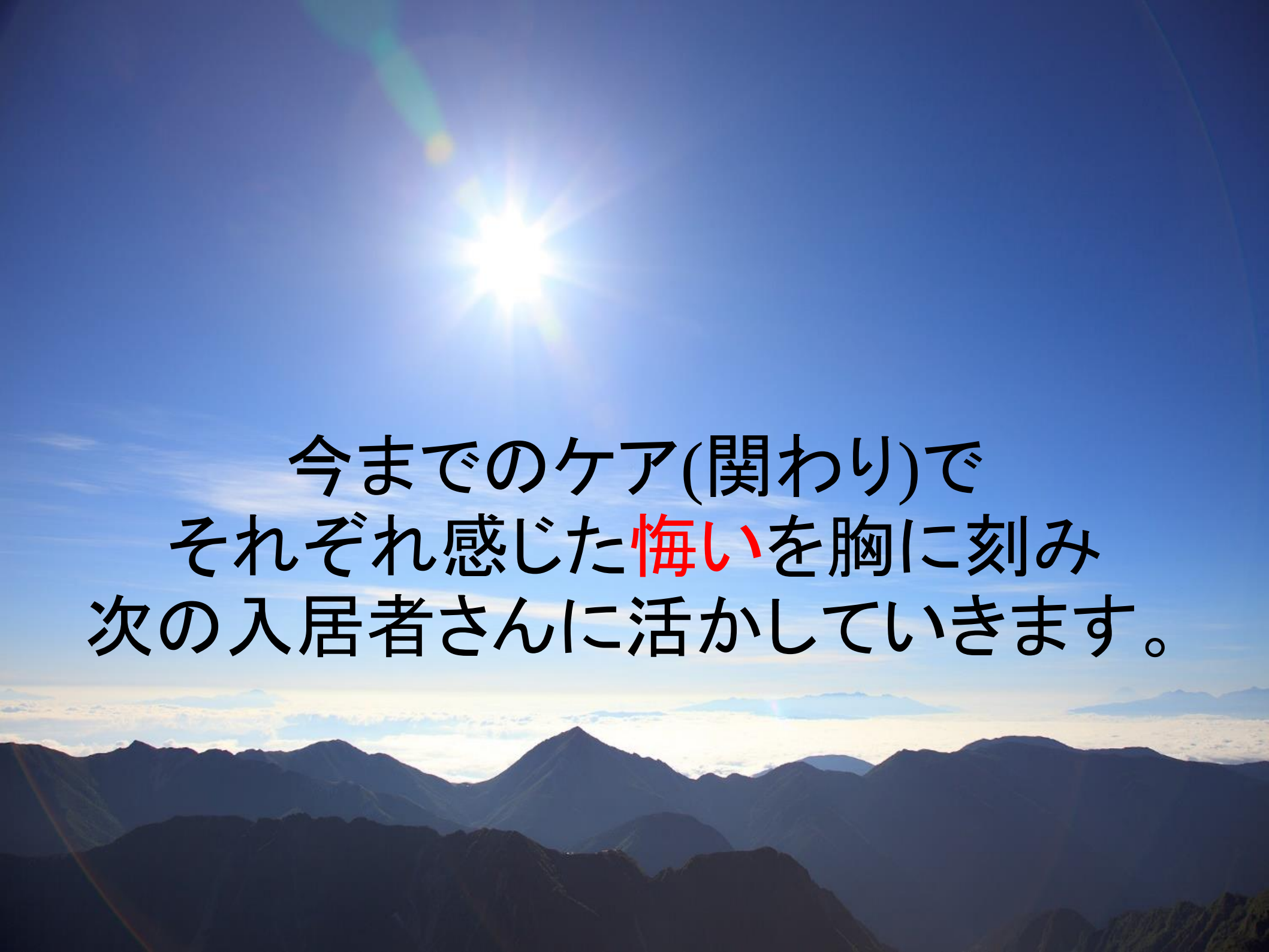
死をタブー視しない、蓋をしない、向き合う

死に対し前向きに捉える、生活の延長線上にあるから

死ぬことだけを前提とした表面的なケアでは、
本当の意味での看取りケアではない

死後、その方の素敵なエピソードを
1つや2つ話そう

看取りはスタッフを必ず成長させる


今までのケア(関わり)で
それぞれ感じた悔いを胸に刻み
次の入居者さんに活かしていきます。

ご清聴ありがとう
ございました。